

ハワイ沖日食観末記

宗 谷 洋 一

1977年10月12/13日の日食観測を、もしも日本で計画すると次の様な案に分れる。第一案はアメリカとメキシコで計画している、日食観測船に参加することであろう。第二案としては、ホノルルから航空機で北上して、日食中心線を飛ぶ方法があり、第三案としては南米・コロンビアに上陸して、アンデスから高度の低い日食を観測することも出来る。

実は2年前の11月の時点で、その年のオーストラリア日食の写真交換会の席上、第二案のハワイ沖の計画に参加したいという申込みがすでに7名も集っていた。

旅費と日程の点から考えてみよう。たとえば“Totality '77”のクルーザーは13日で、1,050ドルかかるから、我々が参加するためにはアメリカの港まで往復する費用を加えて、55万円位、そして少なくとも15日の休暇が必要になる。第二案はその点40名以上の参加があれば、ハワイまでの往復とチャーター機の分担金を加えても30万円以下になりそうである。日程も6日で良い。第三案のコロンビア行は2週間で約70万円の大旅行になる。

日大天文部、現役、OBの方々の推進もあって、とにかく第1回目の集会在1977年4月10日に有楽町、日本ビル別館の地下会議室で開かれた。日程がなく、その上費用は安い。航空機で、1万2,000m上空からの観測ならば曇る心配もない。我々の1977年日食はや

るならば、ハワイ沖でと、話がきまった。

とりあえずホノルルのアロハ航空とハワイアン航空に連絡する。しかしここにある国内航空機では、日食中心線まで1,300 kmを往復するための航続力がないことが判明する。

次は、日本航空との連絡であるが、チャーターについての話合いがつかないままに7月に入ってしまった。

第2回の会合は7月17日、同じ会議室で行われた。世界一の機有数をほこるユナイテッド航空ならば我々の希望を入れて、日食中心線まで飛んでくれそうである。機種もDC-8と決まった。(チャーター費用約700万円)、それに小型望遠鏡を持込むために、座席を取り外してもらうことになるが、そのOKも取れた。

そのまま8月28日に第3回の会合を行って、日食観測をハワイ沖で行うところまで漕ぎつけたつもりだったのであるが、どうも見通しが甘かったようである。8月末までの参加申込みは、23名であった。このまま強行すると1人当たりの参加費用は30万円を大きく上廻ることになる。

申込みされた方には、何とも申しわけないが、この日食計画は中止と決った。

私達のこの計画に対して、一部の人たちから批判もあったと聞いている。しかし私達がこの日食にかけた期待は次のようなものだったのである。

第1に高度1万2,000 mの上空は、地上の空と違って、紫色に感じられる様な素晴らしい青空である。それに地上観測とちがって曇られる心配をしなくてもよい。第2に、おそらく典型的な極小コロナを見ることが出来る。

第3に、本契約の際もしも操縦ミスで、航路が日食帯を大きく外れた場合、私達はチャーター費用を半額に負けさせようというもくろみもあったのである。

それに私達としては初めてのテレビカメラによるコロナの撮影計画も考えられていた。

「航空機はだめでも、せめてホノルルの海岸で部分食を見ることにしましょうよ」という初参加者の声を聞き流して、私達のハワイ沖日食は中止となった。